

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0609
施設名	丸子ベビー保育園
施設所在地	大田区下丸子3-21-17
法人名	社会福祉法人みくに会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

当園には園庭はありませんが、近隣には公園や自然豊かな多摩川河川敷があり、日々の散歩の中で豊かな自然に触れることができる環境があります。そのため、日常的に散歩に出かけ、自然に触れる機会を大切にしています。散歩の中では、ダンゴムシやアリなどの身近な昆虫を見つけて触れたり観察したりする姿が多く見られ、子どもたちは自然の中で様々な発見を楽しんでいます。こうした経験を通して、季節の移り変わりによる自然や生き物の変化に気づき、自然環境やその中で生きる生き物への興味や理解を深めることを目的として、本テーマを設定しました。

2. 活動スケジュール

2025年4月から2025年6月、毎月1～2回活動をしました。

・4月：「はるをさがそう」「そらまめの観察」

散歩の中で春の自然を見つけたり、そらまめを観察したりすることで、自然や食材への興味を広げました。

・5月：「アリはどうやって生活しているの？」

身近に見られるアリに注目し、動きや様子を観察しました。

・6月：「アリはどんな食べ物が好きなのかな？」「ピーマン・パプリカの種とり」

アリの観察を発展させ、食べ物との関係を考えました。また、野菜の種とりを通して食材への関心を深めました。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

テーマに関連する絵本や図鑑、動画を用意し、子どもたちが興味を持ったときに自由に見ることができる環境を整えました。また、虫眼鏡や虫かご、画用紙、クレヨンなどを準備し、一人ひとり、または小グループで観察したり、気づいたことを表現したりできるようにしました。さらに、触れた食材については実際に食べてみる経験につながるよう、食材を味わう機会も取り入れました。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

絵本や図鑑を使って春の自然について紹介し、子どもたちと春のイメージを共有するところから活動を始めました。その後、多摩川河川敷へ散歩に出かけ、子どもたちは「春のいちばん」を見つけることをテーマに植物や生き物を探しました。見つけたものについて「どこが気に入ったのか」「どんなところが春らしいと感じたのか」をみんなの前で発表し、気づきを共有する機会を設けました。

春を探す活動の中で、子どもたちはアリが活発に活動している様子に興味を持ち、アリを捕まえてじっくり観察しました。観察した様子を絵に描くことで、形や動きに目を向けながら理解を深めました。さらに、アリはどのような生活をしているのか、何を食べるのかについて子どもたちと考え、どんな食べ物を好むのかを予想しました。チームごとに予想を立ててホワイトボードに書き出し、実際に食べ物を置いてアリの様子を観察する実験を行いました。結果を見ながら、子どもたち同士で気づいたことを話し合う姿が見られました。

また、食材への興味を広げる活動として、その日の給食に使われる旬の食材に触れる機会を設けました。野菜の皮をむいたり、種を取ったりする体験を通して、食材の形や中身を観察し、食べ物への関心を深める活動も行いました。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

「はるってどんなもの？なにがある？」という問いかけに対して、子どもたちからは「暖かい」「花が咲く」「葉っぱが緑になる」などの声が聞かれ、春のイメージを言葉で表現していました。多摩川河川敷での散歩では、テントウムシを手に乗せたり、歩く様子や羽を広げる様子をじっと観察したりするなど、生き物に興味を持って関わる姿がありました。

アリの観察では、捕まえたアリの虫眼鏡で見ながら「足は何本かな」「触角がある」「体がまるい」など細かな部分に気づき、観察した内容を絵に描いて表現していました。また、「たまごもかきました」「ごはんを食べているところ」と話しながら、アリが生活している様子を想像して描く姿も見られました。

「アリは何を食べると思う？」という問いに対しては、「甘いものが好き」「食パンは甘くないから食べない」「野菜はきらい」など、子どもたちなりの考えを出し合っていました。実験の結果が予想と違ったときには、「大きすぎた」「巣が狭くて持っていけない」などの声があがり、アリが食べ物を運ぶ様子にも着目しながら理由を考えていました。

野菜の観察では、保育者が「さわってみよう」「ざらざらするね」と言葉を添えると、最初は恐る恐る触っていた子どもも、友だちや保育者の様子を見て挑戦するようになりました。皮を細かくちぎったり、種を取り出してつぶつぶした感触を指先で確かめたりするなど、素材の感触を楽しみながら関わっていました。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

発見を楽しみながら、花の色や昆虫に羽があることなどをよく観察し、気づいたことを言葉にして発見を共有する姿が見られました。園で虫かごに収集物を入れて置いておくと、降園時に家族に見せながらエピソードを話したり、発見を伝えたりする姿もありました。虫が苦手な子も興味を持ち、怖いながらも見てみよう、近づいてみようとして主体的にチャレンジしています。じっくり観察し、絵に描くことにより「口がある」「足は何本かな」など身近な昆虫にも新たな発見があり、「口でどんなものを食べる？」など、さらに深く掘り下げる問いが生まれています。

探究活動を行うことで、「順番を決める」「ルールを決める」などの日常の場面でも、互いの意見を言ったり、どのように折衷案を作るか模索したりと、子どもたち自身で対話することが多くなりました。子どもは意見を常に持っており、探究活動が意見を出す機会のひとつとなり、話し合いの経験を積むことができていると実感しました。また、探究活動を通じて「これなあに」という問いかけが生まれたり、「ざらざらしている」などの発見があったりすることで、子どもの食への関心が大きく伸びるきっかけにもなりました。